

keyword:「LGBTQ」「制服」「ジェンダー」「学生」「学校」

## 第1章 研究の動機

近年SNS上でも話題になっているLGBTQに関わる課題、LGBTQ、性の多様性に興味を持ったきっかけは、2022年8月28日AさんのTwitterにて、「実の親でさえもありのままの自分を受け入れてくれない」という記事だった(Aさんの恋愛対象は女性)。

LGBTQの人に限らず、本当の自分、在りたい自分、他とは違う部分を持った自分を周りの人に自己開示(カミングアウト)することは、多大な勇気がいることだと私たちは思う。特にLGBTQなど、まだまだ世の中に深く認知されていないことを周囲に話すのは本当に難しいことだと考えられる。その記事では、勇気をだして親にカミングアウトをしたが、父親に猛反対され心を閉ざしてしまったりと書かれていた。親という一番身近にいる人にだからこそ、受け入れてもらえると思っていたのに受け入れてもらえなかった、分かってほしいと欲しかったという現実、とてもショックを受けた。

できるだけ多くの人にLGBTQを理解してもらい、多くの人が生きやすいと思えるような世界を創りたいと思ったため、このゼミを選択し、まずは日本の性に対する思いやりについて、そして私たちにできることは何かということを探求していこうと思う。

## 第2章 先行研究の検討

日本におけるジェンダー問題に私たちはどう対処していこうかと考えた時、私達は日常生活に接点があるもの、「制服」に焦点を当てた。現在、国際中学校・高等学校では、全ての生徒が男女関係なくスカートやズボン、リボン、ネクタイの着用が可能で、「制服」という限られた枠組みの中で、環境に合わせることができたり、その日の気分によって様々なコーディネートを組み出すことができる。そこで私たちは、奈良県内の高校にどれだけ制服選択制、ジェンダーに配慮した制度が広まっているのかという疑問を持ち、SNSにて奈良県内の高校生を対象としたアンケートを作成してみた。その結果、驚くべきことに殆どの学校に制服選択制は無く、男女にスカート、ズボンの指定があることがわかった。

まず私たちが奈良県内で制服選択制を増やす為、実際に制服選択制をとっている国際高校内で自分たちが作ったオリジナルアンケートを行った。137人に調査したところ、「制服の選択制があることについてどう感じていますか?」という質問に対し、95%がこの案に賛成した。具体的には「男は男らしく、女は女らしくと言う概念がなくなる」という意見が多数寄せられ、他にも「選択肢が増えるだけで安心感がもたらされる」、「暑さ、寒さといった環境に適応することができる」などが挙げられた。次に「あなた自身はLGBTQ当事者ですか?また周りにLGBTQの友達や知り合いがいますか?」という質問に対してはいと答えた人は約37%、いいえと答えた人は約26%、わからないと答えた人は約37%だった。

これらの結果から日常生活において性的少数者は少数でなく、制服選択制がない学校では、学校生活が苦しく、生きづらさを感じている人も少なくないということがわかった。

## 第3章 独自研究

私たちはLGBTQ問題から、自分達高校生にできることは何かと考え、制服に着目した。そして、独自アンケートで再発見した奈良県の制服選択率の低さを変えようと思い、奈良県の制服を扱う業者4社に対し、制服をデザインする上でどのようなことに配慮しているか、高校生が多様性理解のために取り組みやすいことやできることはあるか、制服選択性を増やすためには何をすべきだと考えているか、といったアンケートを実施した。その4社のうちの一つである株式会社トン

ボ様より展覧会にご招待いただき、参加した。そこでは、近年増加傾向にあるブレザーの歴史を始め、現在株式会社トンボが行っている政策等を教えていただく機会を得ることができた。

私たちが訪問する前の制服選択率は、インターネット調査では、奈良県の制服選択率はかなり低かったが、制服会社に調査したアンケートや実際に株式会社トンボの社員の方からのお話を伺うと、取り扱っていた学校がかなり多く、ここ数年でブレザースタイル(性差を感じさせないようなスタイル)の増加が著しいことがわかった。株式会社トンボのとあるデータによると、2023年度に制服のモデルチェンジを行った高校の女子のブレザー採択率が、170校中86%、男子が83%と意外にも制服選択制が広く採られていることが新しい発見だった。ここ数年は制服の見直しが多く見られ、奈良県だけにとどまらず、他府県でも、特に中学校の制服スラックス利用率、性差を感じさせにくいブレザーの利用が増えてきているとのことだった。

しかし、制服選択制が多くの学校で採られていたとしても、当事者らが気持ちよく着こなしているか、着ることに躊躇しなければならない環境に置かれていないか、というような、当事者と制服提供者のLGBTQへの理解度のギャップが大きいといった点では課題はまだ残っている。私たちが独自で行ったアンケートと、制服会社に実施したアンケート結果に大きな差が出たのはその典型的な例である。

今後も引き続き、一人一人の学生がより過ごしやすい学校生活にするために、私たち自身にできることは何かということを探求していきたい。

#### 参考文献

PRTIMES <https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000665.000000983.html> (参照日2023年7月7日)

プライドハウス東京 <https://pridehouse.jp/world/legislation/> (参照日2023年7月7日)

Kemio「ウチら棺桶まで永遠のランウェイ」角川文庫, 2019

羽生祥子「多様性ってなんですか？」日経BP, 2022

表. 都道府県別「女子スラックス制服」採用率一覧

都道府県別  
「女子スラックス制服」採用率一覧

全国平均  
44.4%

都道府県	採用率	都道府県	採用率
1 長野県	87.8%	24 和歌山県	30%台
2 滋賀県	86.4%	25 山形県	
3 神奈川県	84.3%	26 山梨県	
4 千葉県	77.3%	27 長崎県	
5 大阪府	75.2%	28 山口県	20%台
6 新潟県	70.0%	29 兵庫県	
7 京都府	60%台	30 福島県	
8 栃木県		31 佐賀県	
9 鳥取県		32 茨城県	
10 東京都	50%台	33 高知県	10%台
11 徳島県		34 静岡県	
12 沖縄県		35 奈良県	
13 岡山県		36 宮崎県	
14 埼玉県	40%台	37 福井県	10%未満
15 島根県		38 秋田県	
16 北海道		39 富山県	
17 愛知県		40 石川県	
18 群馬県	40%台	41 熊本県	10%未満
19 福岡県		42 香川県	
20 三重県		43 広島県	
21 宮城県		44 鹿児島県	
22 岐阜県		45 青森県	
23 大分県		46 愛媛県	
		47 岩手県	